

清儒俞曲園とその金剛經注 (一)

福 島 俊 翁

一、

宋明の性理學者は、凡て佛教、殊に禪宗系の思想を以て儒教を理解したが、就中宋の陸象山、明の王陽明の思想學問は尤も之に近いものがある。そこでこの陸王の學が盛であつた明末から清初には佛教の研究が儒學者の間に隨分盛に行はれたものである。清朝だけでも帝王で自ら佛教を信じ、特に禪の方面に心を傾けたものがかなり多い。彼の雍正帝（一七二三—一七九四在位）の如きは熱心な崇拜家で親王の邸宅を寺に改めたといふ程であるし、次の乾隆帝（一七三五—一七九四在位）なども佛學に研究の手を染めてゐたらしい。（註二）かうした事實が直接清朝儒者の佛教研究に影響したと言ふ譯ではないにしても、清朝では先づ乾隆の頃から有名な學者で佛學に深く心を潜める人々が出て來てゐる。尤も乾隆の時代では、概して言へば南方の學者と北方の儒との傾向が違つて居て、北方の儒は道教に興味を持ち、南方の儒者は多く佛教を研究する風があつた。當時有名な學者で、薛香聞（名起鳳字家三）と云ふ人がある。小父の不二和尚（廣嚴福公）に楊州法雲寺で養はれ、大いに

世間底を論究して解悟する所があり、儒佛に出入して文名を擧げ乾隆帝の南幸に際して召試に應せようとした事がある。(註二)

又瑞金の人、羅臺山(名有高)の如きも、教を宋道原から受けて、程明道、陸象山、王陽明、羅念菴の書を喜び、轉じて當時大司馬で有名な儒家の彭芝庭(啓幽)の門に入つて其子彭尺木と共に淨業を修め門關を鎖すこと七十日、首楞嚴經を讀んで參究し、或時は僧舎に在つて華嚴經を日々讀誦し念佛三昧を修し、尋いで楊州高旻寺の照月和尙の險峻な門庭に參じて遂に禪要を獲得してゐる。

(註三)

同時代の大家で儒禪に造詣する處の深かつた人に汪愛廬(縉)即ち大紳先生がある。壯年の頃、陳龍川の文集を讀んで其の人となり慕ひ大いに世に用ゐられん事を思ふたが、やがて宋儒の五子の書を讀み又西來の梵書を讀むに及んで、始めて其の非なることを悟り、趙宋以來儒と佛とが争ひ、儒と儒とが争うて膠葛紛紜たるものもあるも、能く之を正すものが無いと憤慨して、其の同異を統一し其の隔閡を通ずる爲に、明の趙大洲の二通の作に仿つて二錄三錄と云ふ書を著し、又讀書四十偈私記なる著を出して大いに佛教思想を鼓吹したことがある。(註四)彼の友人で、前の羅臺山とも交友の厚かつた彭尺木(紹升)も如上の人々と同趣の傾向を持つた學者であつて、乾隆時代に於ける佛教研究家としては中心人物である。

彭尺木は乾隆三十四年の進士で、父は大司馬となり名家を以て聞えた上に當代の大儒ある所の彭芝庭である。そこで最初は洛陽賈誼の人となり慕つて建白を以て功名を千載に残さうと云ふ野心があつた人であるが、後に先儒の書を讀破するに及んで陸王の學に共鳴を持ち、薛香聞や汪大神など、游交して大藏經の閱讀をやり、佛教の蘊奥を究めて、寒素な生活に無欲な安住を求めた。彼は持戒甚だ嚴肅なるものがあつたが、上來の人々とは違つて禪よりも早く淨土門に歸入し、又古文を治め掌故に通じ、名臣、良吏、儒者の言行を述作し信仰を告白するなど、卓然として後世に傳ふべきものを残してゐるが、當時南方の儒家が好んで作つた語錄體の文ではなく、江藩も云つてゐる様に、彼の論學の文は「精心密意、紀律森然、談禪之作、亦擇言爾雅、不涉禪門語錄惡習」ものであつた。彼は淨土の行者として篤信の學者であつたが最後はやはり向上の第一義を參究すべく禪門に歸した様に見える。(註五)

此他史學に造詣の深い常熟の人程在仁も汪愛廬の風を欽して之に師事し、陸王の學に入り、僧舍を假りて徧く大藏經を閲し十有餘年儒と佛とを學んでゐる。(註六)

以上の如き乾隆頃の著名な學者で佛教に入り修禪に身を委ねた人々は、殆んど凡てが陸王の學者であつて、淨禪の研究によつて人欲を捨て、以て心性の源泉に徹し所謂見性直入の體驗を求めている者である。然るに乾隆以後に出た學者の態度は、彼等とは稍々色彩を異にし、徑路が違つてゐる。

と云ふのは清朝の儒學は已に乾隆嘉慶の時代から、從來の宋明風の性理學に飽きて、復古的な思想になつて來て居り、所謂漢學熱が出來て來てゐた。漢學といつても、古文家と今文家との二派があつて、一は東漢の學者即ち許慎や鄭玄、馬融の如き訓詁考證に傾き、一は西漢の經師即ち伏生や董仲舒、何休などの微言大義を知らうとする神祕派に屬するものがあるが、就中後者の學者で所謂公羊學派に系統づけられる人々の間に佛教の研究が盛に行はれ出した。固より公羊流の學問は一種の天人の學であつて宗教的色彩が濃厚である所から、其派の學者達が佛教の原理に研究の方向を取ると言ふことは、或は當然の事であると言ひ得よう。かうした意味の學者では先づ第一指を天才的な文章家で公羊學を主張した浙江の人龔自珍(定盦)に屈しなければならぬ。龔自珍は楊湖派公羊學の大家劉逢祿(一七七六—一八二九)の門に出た學者で道光九年の進士である。彼は經學の方面では師承の公羊學的研究を持つて五經の大義を闡明しようと力めたのみならず歴史地理に詳しく卓見を示してゐる。が晩年には佛教の研究に入り、殊に天台の教理を索つて摩訶止觀に通じ重輯六妙門序や發大心文などを書いてゐる。(註七)然し彼は經學と佛教とを調和したと言ふ程のことはなく信仰の上から佛學に志したに過ぎないけれ共、後起の公羊學者に影響する所が多い、彼と同門の友人で湖南出身の魏源(默深一八四五死)も、亦道光二十五年(一八四五)の進士で龔自珍と相並び稱せられ、清朝の歴史に詳しく、西漢今文の學を奉じて詩、書の研究をなし間々獨創の見を著してゐる人であ

るが、彼も亦晩年には佛教を究め淨土教を鼓吹し淨土四教、無量壽經會釋などの書を公にし自ら菩薩戒をうけ、名を改めて承貫と稱した程で（註八）又後の今文家に影響を與へてゐる。

是等の人々と殆ど同時に俞樾が出てゐる。俞樾（一八二二—一九〇六）字は陰甫、曲園と號し德清の人で道光三十三年の進士である。春在堂全書に收められてゐる曲園自述詩自注に據ると、四歳の時から母の郷里臨平鎮に居り臨平の孫氏の書屋で讀書し更に戴貽仲先生に従學すること五年（註九）とあるのみで十五歳以後は別に定つた師を選んでゐない様である。然し彼の同郷の先輩たる陽湖派の學者戴望（一八三七—一八七三）とは深く學問上の交際を結んでゐる事が彼の書簡集（註一〇）によつて視はれるから、戴望などの公羊思想の影響も受けたであらう。元來俞曲園は純粹な公羊學派の人であるとは斷言出来ない人であるが、彼が後年退官の後蘇州に住んだ頃、戴望の師である宋翔鳳が生存してゐたので、彼から陽湖派の公羊説を學んだのであつて、公羊學にもよく通じ公羊家の立派から春秋を解した達齋春秋説、春秋天子之事論などを著作してゐるから、彼の學問には公羊的色彩がかなり多い。（註一一）

然し俞曲園の學風は何と云つても高郵派の王念孫や王引之に負ふ所が多い、勿論直説彼等に師事したのではないが、彼の名著、群經平議三十五卷、諸子平議三十五卷、（註一二）古書疑義舉例七卷（註一三）の如きは全く王念孫の經義述聞、讀書雜誌或は王引之の經傳釋詞に仿つたもので、其の態度

は宋朝以來の性理學者の謬癖を避けて古典の文字を聲音に注意し、字形よりも假借を以て訓詁を究めんとしたので、經學の上に一道の光明を投じたのみでなく、清朝に於ける諸子學研究の導火線を爲した感がある。孫詒讓の墨子間詁とか王先謙の荀子集解の如きは俞樾の學問に負ふ所が甚大であると思得る。而して彼が博覽多識考證精密な述作を残すことが出來たのも、更に清初の鴻儒顧炎武の影響も鮮くないと思ふ。それは彼が十九歳の青年の時代から顧炎武の日知錄を愛讀研究し其の小箋一卷を作つてゐることからも察せられる。兎に角俞樾は絶倫の精力家で其の全集たる春在堂全書は堂々五百卷といふ大部なもので清朝一代を通じて個人の著作としては程尤大なものは他に例を見得ないのである。彼がかうした述作研究に入る前は清儒の誰もがしたやうに官吏生活であつた。彼は道光庚戌三十三年に當代の大政治家曾國藩の下に甲第一番で進士に及第し翰林院庶吉士となり、咸豐五年河南學政に擧げられたが、些事を以て彈劾せられ七年退官してから蘇州に閑居して著述を専らとした。其後彼と同年で親交のあつた李鴻章に推薦せられて、曾て沅元の創立した杭州の話經精社の講席を主り三十一年の久しき校長として多數の英才を打出した。晩年は郷里德清に靜居し専ら佛教の研究に終始するに至つた。

吾人がこゝに紹介せんとする曲園の金剛經注も彼の晩年内子姚夫人が光緒五年己卯(一八七九)を以て逝去した爲に其の冥福を祈るべく金剛經訂義一卷を手書し(註一四)其後諷誦之を久うして其の要

を得ざりし事を悟つて更に光緒九年（一八八三）金剛經注二卷を著したもの（註一五）に據らんとするのであつて、彼が儒家から信仰生活に入り、其の該博な考證的手腕によつて所謂詰經の法を以て佛經を讀まうとする業績を視はんとするものである。

一一、

俞曲園の金剛經に向つて下した意見は上述の金剛經訂義一卷並に金剛經注二卷の中に盡されてゐる外、更に金剛經中に所謂四句偈に關する考證が彼の隨筆なる茶香室叢鈔卷十三の中と春在堂隨筆卷七の中とに著はれてゐる。吾人は今光緒二十三年（一八九七）の重定にかゝる春在堂全書に收められてゐるものを底本として記述をすゝめたいと思ふ。

元來俞曲園の注する所の上述の經文は、最古の漢譯本たる羅什譯のものの臺本であつて、間々新譯のものを引いて自己の所論を助けた場合もあるが、全體に於て羅什譯に據つたものであるから、今日廣く行はれてゐる本文であると共に、我禪門で夙に提唱される川老の注とは其の本文が同一であるから、兩者の見地の相異を比較して見るには頗る便利なものがある。

そこで俞曲園の本經に對する見解として、其の根本思想とも云ふべきものは、其の金剛經注の序文並に訂義の中で詳論してゐる所の、本經の本旨に關する獨自の立場である。彼は曰く、本經は五

祖が僧俗に勸めて誦讀せしめ、此經を誦すれば見性成佛する事が出来るを謂つてより以來世の重んずる所となつたのであるが(註一六)余は嘗て此經を三復して竊に經の大旨が、佛須菩提に告げて

應如是住。如是降伏其心(第二分)

と仰せられた點に在ることを信する者である。是に云ふ住とは此心に住するの意であり、降伏とは此心に降伏する事であつて、此心とは所謂阿耨多羅三藐三菩提心其者に他ならぬ。即ち住と言ひ降伏すと云ふも等しく此の阿耨多羅三藐三菩提心であつて、其間相離れた別の内容を存する義は無い。即住即降伏である。住すれば實、降伏すれば虛、是を以て無實無虛である。(註一七)

俗解では、住は真心、降伏は妄心の上に在ると見て、真心は當に住めて之をして不退轉ならしめ、妄心は當に降伏して之をして擾亂せざらしめねばならぬと言ふ風に、此心を眞妄二面に分別して考へてゐるのであるが、全く語氣を失つた見方であるのみならず、如來立教の本旨を謬るものである。彼の明の洪武年間に宗泐が詔を奉じて、金剛經を注したが、其も亦從來の謬見を襲うてゐる。經義の晦きこと久しと言はねばならぬ。

又本經には、「不住色布施。不住聲香味觸法布施」と説かれてあるが、皆不住を以て直に住としてゐる。不住を以て住とすることは則ち即住即降伏と云ふことである。其義は更に第十七分の爾時須菩提白佛言。世尊。善男子善女人發阿耨多羅三藐三菩提心。云何應住云何降伏其心。佛告

須菩提善男子善女人發阿耨多羅三藐三菩提心者。當生如是心。我應滅度一切衆生。滅度一切衆生已而無有一衆生實滅度者。

と云ふ言によつても明にせられる。此の一分は元來「第二分の義を反復申説したもので其の意味は全く等しい。我應滅度一切衆生と云ふのは即ち所謂、「應如是住」である。「滅度一切衆生已而無有一衆生實滅度者」と云ふのは即ち所謂「應如是降伏其心」である。此の數語を得來つて覆つて第三分の文義を見れば甚だ明瞭となる。故に第四分の末に

菩薩無住相布施

といひ

菩薩但應如所教住

と言つてゐるのである。上文の住が一義を爲し、降伏が一義を爲すとして此文には降伏には及ばぬが蓋し「但應如所教住」といへば即住即降伏である。俗解では此の住の字をば止の字の解に考へ、不住の住をば染著の解に作るが故に殊に其旨を失ふものとなつてゐる。今儒道の方面から之を言へば論語に

子貢問曰。有一言而可以終身行之者乎。子曰。其恕乎。己所不欲。勿施於人。(衛靈公)
といふは即ち「應如是住」である。

子貢曰。我不欲人之加諸我也。我亦欲無加諸人。子曰。賜也。非爾所及也。(公治長)

といふは即ち「應如降伏」である。又

子曰。衣敝緼袍。與衣狐貉者立。而不恥者。其由也與。不忮不求。何用不臧。(子罕)

とは「應如居住」である。

子路終身誦之。子曰。是道也何足以臧。(子罕)

といふは「應如降伏」である。(註一八)

思ふに俞曲園がこゝに論語を引合に出したのは如何なる意であらうか。固より儒家の論語に於ける解釋は甚だ多様で定説を擧げる事も中々容易でない場合が屢々ある。けれ共俞曲園は大體に於て論語については古注を遵奉する學者であるから、其の立場からこの章を眺めたと思ふのであるが、最初の衛靈公篇の場合は孔子が子貢に恕を説いて、己の欲せざる所は他人にも施す無き行が即ち恕の道である。此の恕といふ一言を以て終身貫通すべきだと言ふのである。處で公治長篇では、子貢が恕の道に住すと自任するに對して「賜や爾の及ぶ所に非ず」と之を否定する様な口吻を洩してゐる。こゝの孔子の言葉は孔安國の注によると、

言不能止人使不加非義於己。

となつてゐる。つまり子貢の望む所の恕の道即ち自己の願ふ所を凡て心の如く(恕の字の義)あらし

めると言ふことは、聖人君子と雖も中々の難事である。然るに自ら恕を以て自ら任ずる者と信すれば、そこに生じた自負の心が同時に恕の道を離れしめるものとなるのではあるまいか。孔子が子貢に汝の能くする所に非ずとは言はずして、及ぶ所に非ずといったのは、子貢に對して無論之を禁じたと言ふ譯でなく之を勵まし之に勉めしめる意志から發したものに相違ない。(注十九)故に一方で恕を肯定し乍ら或時は同じ人に恕を否定するが如く見えて實は、眞實に恕を體驗し得る道を教へた事になる。即ち恕に住せねばならぬが、同時に此が恕だと自己満足を表すことになれば、そこに恕がないことになる。恕を行つて恕を知らず、恕に住して恕に執着せざる所に眞實の恕が生きて來る筈である。孔子の一言がそこまで徹底して見られた時に一は應如是住であり、一は如是降伏其心である事が明瞭になると思ふ。

次の子罕篇中の場合は同様で、子路が外形に執はれず弊衣を纏うて貴顯の前に立つも内心恥づる所がないといふ點は、「慥はす、求めず」して貪惡伎害を疾んだ古詩の心に一致してゐるので、何處に不善があらう。子路は實に純眞な心の持主であると孔子が之を推賞した。こゝは應に此の心に住する事の妥當性を孔子が認めたものであるが、子路は之を聞いて、「不伎不害」詩抑風雄之篇てふ詩を平常に口誦し、自ら此に任じ大いに得意がつた譯である。かうなると孔子は「何ぞ以てヨシ臧とするに足らん」と戒め抑へたので、「降伏其心」と言ひ得る。即ち眞に子路が不伎不害の人と成り終る爲には「不

「伎不害」といふ心に捕はれてゐてはならない。こゝに住即降伏の意を以て孔子の肺肝と見ねばならぬ、と俞曲園は最も徹底した見方をしたものと思ふ。(俞曲園は論語について、群經平議の中や茶香室經說第十六卷や其他隨筆の中に自己の意見を書いて居るが、此の章について詳説した所がない様に思ふから聊か蛇足に渡る厭はるが敷衍を試みて見たのである)

かうした考から見ると儒家の方でも、實を曰ふこと虚の如くで金剛經の無實無虚と言ふ意と一致する。若し住する所なければ虚に涉るであらうし住する所有りとすれば又實に滯ることになる。それであるから「應如是住如是降伏其心」と説いて無我無執着の境を開示したものである。此點は俞曲園の言によれば

儒理佛理。一以貫之 (金剛經訂義第二)

である。而して是經はこの即住即降伏の旨を推論して「無法可得、無法可説」と言ふに至つて眞に無上甚深の妙義となるのである。

然るに佛教家の中で此思想を支那に流轉してから人をして佛法を輕蔑せしむるを懼れて、遂に其の經文中に妄に増益する所があつた。元來此經を讀誦すれば無量無邊の福德があると云ふ所で、護法の苦心より生じた事ではあらうけれ共、本文の増益挿入と云ふ事によつて經文が隔絶し意義が不明になつたのである。此點は佛經傳持者の罪であつて今日からは之を考勘し本文批評を加へて然る後に之を讀まねばならぬのであるとも言つてゐる。

二、

金剛經全體の本文に對する疑問は、誰しも持ち得る所であつて、早くから之に關する學者の研究もあるにはあるが、其の最も光彩あり考證精密なるものは吾松本博士の金剛經と六祖壇經の研究（大正九年一九二三年刊）であらう。けれ共俞曲園も夙に此點に注意し今日の金剛經の本文が雜揉である事を認定し、松本博士のそれに先つこと凡そ三十年前に於て、稍精細なる研究を遂げ、以て經文中に於ける後人附益の部を摘出し之を甄別して其證左五條をも概括して、金剛經註の序文に述べてゐる。曰く、今の金剛經第七分の終に

「一切賢聖、皆以無爲法。而有差別。」

といひ、次に

（第八分の初）

須菩提。於意云何。若人滿三千大千世界七寶。以用布施。是人所得福德。寧爲多不。須菩提言。

甚多。世尊。何以故。是福德卽非福德性。是故如來說福德多。若復有人。於此經中。受持乃

至四句偈等。爲他人說。其福勝彼。何以故。須菩提。一切諸佛。及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法。

皆從此經出。

とあるけれ共、先に一切賢聖云々といへるは下文にある所の

須菩提。所謂佛法者。卽非佛法。〔今第九分初〕須菩提。於意云何。須陀洹能作是念得須陀洹果不。須菩提

言。不也。世尊。何以故。須陀洹名爲入流。不入色聲香味觸法。是名須陀洹。云々

といふ須陀洹の諸文の發端を爲すものであつて、須陀洹果より如來地に至るものが一切の賢聖であることを説く段である。然るに此の中間に七寶布施の文を挿入した爲に一切賢聖とは意味の連絡を缺ぐことになつてゐる。是後人が附益した證の一である。又今の第十分の中に

須菩提。譬如有_レ人身如_レ須彌山王。於意云何。是身爲_レ大不。須菩提言。甚大。世尊。何以故。佛說_レ非身。是名_レ大身。

とある所の佛說非身是法大身は是は譬喩の詞であつて下文に

所以者何。佛說_レ般若波羅蜜。卽非_レ般若波羅蜜。

とあるのが正意である。然るに其の中間に今文では

須菩提。如_レ洹河中所_レ有沙數。如是沙等洹河。於意云何。……我今實言告汝。若有_レ善男子善女人。以_レ七寶滿爾所洹河沙數三千大千世界。以用布施。得_レ福多不。須菩提言。甚多。世尊。云々

等の七寶布施の文が這入つて來た爲に此間の文義が隔絶してゐる。是は後人附益の第二證である。佛が經を説き終つてから讚歎の言を述べると云ふのが普通の體例で、假へば楞嚴經の末に

若有衆生。能誦此經。能持此咒。直成菩提。無復魔業。

と云ふが如きである。然るに此經では處々に之に及んでゐる。而して經文が未だ半ばならず、或は佛の意旨が未だ宣べられてゐないに係らず須菩提は輒ち衆生の信不を問ひ、世尊は輒ち是經の福德を陳べてゐるのであるが、何故にかくも忙しく急遽に渡るのであらう。是其の疑問とすべき點であつて、恐らく後人の附益にかゝるものであらう。是れ其の第三證である。

又佛經では普通經文が既に訖つて自ら經名を表すのであつて、巨力長者經の末に

阿難白佛言。此經當以何名。我等云何受持。佛告阿難此經名曰巨力長者所問大乘經。

とあるが如きが一般の體例である。然るに此經では所謂第十三分中に之を出し

爾時須菩提。白佛言。世尊。當何名此經。我等云何奉持。佛告須菩提。是經名爲金剛般若波羅蜜經。以是名字汝當奉持。

と言つてある。未だ經文を説かぬ先に經名を説いてゐる。之は須菩提の問も世尊の答も皆序を失つたもので、是も後人の附益と見るべき、其の第四證である。

又金剛經中には屢々四句偈といふものに言及してゐる。然しこの四句偈とは果して何を指したものであらう。或は之を

若以色見我。以音聲求我。是人行邪道。不能見如來。

の四句だとも言ひ、或は

一切有爲法。如夢幻泡影。如露亦如電。應作如是觀。

の四句だとも言はれてゐるが、果して何れであらうか。而も是等の偈の一は、今本の所謂第二十六分に出て、後の分は第三十一分に出てゐる様な次第で佛が指して四句偈と言つた際には、其より前には是等の偈は少しも發表されて居らぬのである。然るに之を聽聞する須菩提が、此の四句偈の何たるかを問はないのは如何なる理由であらうか。嘗て楞伽經を讀んだ時に其中に四句偈と思はるゝものを發見したが其は本來金剛經にある文でないものである。疑ふらくは佛が平常此四句偈を以て金剛經と並び授けたのを諸弟子後人が遂に牽連して之に及んだものであらう。此れ現存漢譯經の中に後人の附益のある第五證である。(四句偈に關する俞曲園の創見は後に之を述べるつもりである)

以上の如き五證は金剛經なるものの本文中に後人の附加竄入のあることを明に物語るもので、之有るに由つて叙述の次第を亂し、其旨を晦からしめてゐるのである。

思ふに俞曲園の本文に對するこの批評が果して全部妥當なりや否やは、今俄に判斷し難いかも知れぬ。今一層深い根本的な研究を科學的方法から出發して、爲し遂げて見た上での問題ではあるが、一面儒家の立場で、自己の考證的興味からではあらうが、佛典の本文を文脈思想の上から解剖論斷し、他經の體例と比較論證せんとする態度には捨て難い意味を残して呉れたのではなからうか。尙

彼には小さい字句上の考勘について相當合理的な見識を示した箇所が往々あるが、其文でなく、讀經で疑點とすべき諸點で、俞氏の看過した所もあるであらう。其方面は、上述の松本博士の同じ研究考證と併せ考へるならば大いに利する所があらうと思ふ。

それから又俞曲園は、今本金剛經が今日の如く章を分ち其に法會因由分とか應化非眞分とかの名稱をつけ三十二分としてゐるのは全く本來の形ではない。之は梁の昭明太子の定めた所と傳へられ共、其すら疑はしい。元來是經にさうした分章があつた譯でもなく名目が存したのでもない。儒教其他の古典でも然りで古書には篇名はあつても章名があつた者はないのである。

世尊。金剛經分三十二分。各自有_二名目_一。爲_二梁昭明太子所_レ分_一。此最爲_二無理_一。殆_レ俗僧所爲_レ而託_二之昭明_一也。凡古書分章大率類_レ此。(註二十一)

と云ひ、自分は章句を事とする陋儒で晩年に佛教をかちつたもので西來の大義に於ては何等聞く所を有たぬものであるが、此經には竊に獨得の見があるので、之を註釋するに當つて本經文を分つて上下の二篇とし、上篇は七節、下篇は之を十一節とし都合十八節として見た。そして從來の經文中で後人の附加挿入したと思はるるものを衍文として省いて眺めて見ると脈絡が分明で、五祖弘忍禪師の所謂「誦此經。可以見性成佛。」と言つたものも其の大概をつかむ事が出来るやうに思はれる。(註二十二)と自述してゐる。つまり俞曲園は、從來の分段章句の法を破つて、最初の『如是我聞』の所

から今本の第十五分に属する『如人有目。日光明照。見種種色。』に至るものを七節に區分し之を上篇とし、所謂即往即降伏或は無實無虛の主旨を反覆申明したものとす「須菩提。當來之世。若有善男子善女人。能於此經。受持讀誦。以下」當知。是經義。不可思議。果報亦不可思議。』迄の讚歎文を衍文で後人の竄入として刪り、下篇は『爾時須菩提白佛言。世尊。善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心。云何應住。云何降伏其心。……』てふ今本第十六分中の一段を以て始り最後の「一切世間天人阿須羅。聞佛所說。皆大歡喜。信受奉行。」の末文までを十一節と定めてゐる。而して下篇の義は皆上篇の中に具はつてゐるのであるが、其内或は上篇中で未だ盡されてゐない點を引申し、或は其の未だ備らざる點を補益してゐる。そして詳略往々上下篇を通じて互に見れてゐる所を見ると、これは恐らく佛弟子の間に於ける傳述の相異したものが印度に存在し、自ら別に行はれたものであらうが、支那に傳入するに及んで遂に合して之が一となつたものであらう。そして如是我聞の發端から信受奉行の總括まで首尾を聯綴して再び分つ可らざるものとしたらしい。(註二十三)この俞曲園の考察は大體の見當が吾松本博士の説と相似てゐる様に思はれる。(註二十四)

——未完——

(註一)、山内晋卿氏、「支那佛教史之研究」中、「清朝帝室と佛教」の條に詳説されてゐる。

(註二)、清、江藩、國朝宋學淵源記附記、薛香聞師の條、先生諱起鳳、字家三、少孤依「鼠氏廣嚴福公」、……先生從師讀、福公

即吳人所稱不二和尙也。問與先生論出世法、輒解悟。乃大喜曰、「末法衆生、不識心原、儒佛互爭、子欲見儒者、身說法要、以見性爲宗、誠能見性、何儒佛之有。」先生之學、出入儒佛、所由來矣。

(註三)、同書、羅有萬の條、三十年應順天鄉試、出彭芝庭先生之門、與彭公子尺木居士友善。屢至吳門、主其家、同修淨業、閉關七旬、讀首楞嚴、參究上乘。……之石甕山僧舍、日誦華嚴經、修念佛三昧。尋至揚州高旻寺、主僧貞公照月、門風甚峻、屢呈見解、不許、曰、此是口頭學、得何關本分、詰以古德機鋒、不能對、乃發憤入禪室、隨衆起倒、晝夜參究、居半年、積疑頓釋、遂辭去。

(註四)、同書、汪愛盧師の條、壯歲讀陳龍文集、慕其爲人、思見用於世、既而讀宋五子書、又讀西來梵筌、始悟其非、謂趙宋以來儒與佛爭、儒與佛爭、輾轉紛紜、莫能是正、乃統其同異、通其隔阂、仿明趙大洲二通之作、著三錄三條、以明經世之道、又著讀書四十傳私記、以通出世之法、嘗謂藩曰、吾于儒佛書、有一字一句、悟之十餘年始通者、讀三錄、當通其可通者、不可強通其不可通者。

(註五)、同書、彭尺木居士の條、尺木居士、又號知歸子、名紹升、字九初、大司馬芝庭公之四子也。入齡蹟于戶闔、損一目、早歲舉于鄉、乾隆己丑成進士、例選知縣、不就、生性純厚、稟家敦、讀儒書、謹繩尺、初慕洛陽賈生之爲人、思有以建白樹功名、後讀先儒書、遂一志于儒言儒行、尤喜陸王之學、及與薛注二先生遊、乃閱大藏經、究出世法、絕欲素食久之、歸心淨土、持戒甚嚴、好作有爲功德、鳩同人施衣施棺恤廢放生、鄉人多化之、修淨業後、一切屏去、惟讀古德書、間作漢隸、收奎金石文字、云々……乾隆四十九年、大司馬卒後、往深山習靜、參究向上第一義、自云、當沈舟破釜血戰一番、掃盡群魔、以還天明、作夢語、示諸兄子、久之又復家居、尋卒。

(註六)、同書、程在仁の條。

(註七)、定盦文集卷下。戒將歸文。發大心文。知歸子讀。定盦文集補、支那古德遺書序。重輯六妙門序。重栞圓覺經略疏序、等參照、(四部叢刊本)

(註八)、梁啓超著、清代學術概論、說分期衰落期、九佛學。

(註九)、春在堂全書中、曲園自述詩「東髮從師戴文君。自注、余讀書孫氏、所從師爲戴貽仲先生、先祖母戴太夫人姪孫也。

(註十)、春在堂尺牘一、與戴子高。又與戴子高。又與戴子高。

(註十一)、第一樓叢書之八ノ一、詁經精舍自課文、及第一樓叢書九ノ一、湖樓筆談。

(註十二)、春在堂錄要、○群經平議三十五卷ノ條、余治經以高郵王氏爲宗、其大要在正句讀、審字義、通古文假借、是書

竊附王氏經義述聞之後、云々

同書、○諸子平議三十五卷ノ條、是書繼群經平議而作。竊附王氏讀書雜誌之後、云々

○曲園自述詩ニ、十年春夢付東流、尙冀名山一席留、此是學求經義始、瓣香私自奉高郵。ノ自註ニ、是年夏間無事、讀高郵王氏讀書雜誌、廣雅疏證、經義述聞諸書而好之、遂有意治經矣。

(註十三)、第一樓叢書五、古書疑義舉例。

(註十四)、春在堂錄要ノ中、金剛經訂義の條云、

余手書金剛經、爲內子資冥福、因成訂義一卷、蓋即以詁經之法讀佛經也。

(註十五)、同書ノ中、金剛經注ノ條云、

余舊有金剛經訂義一卷、刻入俞樓稊纂、然未得其要領、諷誦久之乃知、世傳昭明所定三十二分、實強作解事者、此經當分上下二卷、其半有佛弟子附益者、雖未敢刪削、要當分別存之、而以卽住卽降伏爲全經大旨、故復爲此注、發明無實無虛之義。

(註十六)、五祖弘忍禪師以來金剛經讀誦流行ノコトハ蔣之奇ノ四卷楞伽序ニモ出ヅ。

(註十七)、俞曲園、金剛經注序文

(註十八)、俞曲園、金剛經訂義第一、及金剛經注序

(註十九)、照井全部、論語解ニ由ル、曰ク「此語子貢論恕之行。而孔子勵之也。不曰非爾所能也、而曰非爾所及、則知非抑而禁之也矣。夫恕之行、聖人之所難爲。故雖子貢、而未輕許之。勵而使勉之矣。」(續日本名家四書註釋全書本)

(註二十)、「不_レ忤_レ不求、何用不_レ臧」。馬融ノ註ニ、忤害也、臧善也、言不_レ忤害不_レ貪求何用爲_レ不_レ善、疾_ニ貪惡忤害_一之詩。

邪_ノ疏、孔子言_レ之以善_ニ子路_一也。子路終身誦_レ之者、子路以_ニ夫子善_レ己、故常稱_レ之。子曰、是道也何足_ニ以臧_一者、孔子見_ニ子路誦_レ之不_レ止、懼_ニ其伐_レ善、故抑_レ之。(十三經註疏本)

(註二十一)、俞曲園、九九銷夏錄卷五、古書有篇名無章名ノ條。

(註二十二)、俞曲園、金剛經注序ノ末段

(註二十三)、俞曲園、金剛經注下篇、末尾注文。

(註二十四)、松本文三郎氏、金剛經ニ六祖檀經の研究八三頁——一三五頁參照、

(昭和三、五、三〇稿)

從_レ生_ニ至_レ老_ニ只_レ這_レ漢_一。歷々孤明沒_ニ形段_一。

雖_レ無_ニ形段_一却_レ諸訛。要_ニ是紅爐千萬煨_一。

如今何處_ニ是紅爐_一。兩浙江南試_ニ行看_一。

空生老矣渾_ニ不知_一。栽_ニ松_一只在_ニ寒岩_一畔。

(東山外集上)